

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：37130

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K11115

研究課題名（和文）身体疾患をもち自殺念慮を有する在宅療養者の訪問看護実践モデルの開発

研究課題名（英文）Development of a model of nursing practice for home visiting nurses working with patients with physical illness and suicidal ideation

研究代表者

千々岩 友子 (Chijiwa, Tomoko)

福岡国際医療福祉大学・看護学部・教授

研究者番号：40637104

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、身体疾患をもち自殺念慮を有する在宅療養者に対する訪問看護師の看護実践の現状や課題を解明し自殺予防のための訪問看護実践モデルを開発することである。訪問看護師への量的・質的調査を行い、訪問看護師の看護実践は自殺ケアの経験や困難感に有意に関連しており、訪問看護師は療養者との関係性を維持していくことに重点をおきながら『死にたい』気持ちの核心には触れないように関係をつないでいく経験をしていたことが明確になった。訪問看護師は自殺念慮者の自殺のリスクアセスメントや自殺念慮者とのコミュニケーションについての課題があることが示され、今後、モデル化は多職種連携の実態を調査した結果を基に作成する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、入院期間の短縮や訪問看護サービス利用者の増加に伴い、身体疾患をもち自殺念慮のある患者は在宅医療に存在していると考えられ、訪問看護師の実態調査では訪問看護師は高い割合で自殺念慮をもち療養者へのケアに携わっていることが明らかになっている。したがって本研究結果は在宅医療での自殺対策のための訪問看護実践に貢献する。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to elucidate the current status and issues in the nursing practice of home visiting nurses for patients with physical illness and suicidal ideation, and to develop a model of home visiting nursing practice for suicide prevention. A quantitative and qualitative survey of nurses revealed that nursing practice was significantly related to their experiences and difficulties with suicide care, and that nurses tried to connect with the patient while focusing on maintaining the relationship with the patient, but avoided actively addressing and engaging with the suicidal ideation. It was shown that nurses have issues regarding suicide risk assessment and communication with suicidal ideation, and going forward, it is necessary to clarify the actual situation of multidisciplinary cooperation surrounding the patient will be investigated, and a model of home visiting nursing practice for patients with physical illness and suicidal ideation.

研究分野：精神看護学

キーワード：自殺念慮 身体疾患 訪問看護 在宅医療 home visiting nurse suicide prevention suicidal ideation 在宅療養者

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C-19、F-19-1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

自殺の原因は複合的なものであるという前提があるが自殺の死因の第一位は健康問題であり、その「健康問題」の病気の内容はうつ病が最も多く、次いで身体の病気となっている(厚生労働省, 2017a)。近年、入院期間の短縮や訪問看護サービス利用者の増加(厚生労働省, 2017b)に伴い、身体の病気をもつ自殺念慮のある患者は入院患者のみならず、在宅療養者にも存在していることが推測される。海外では、訪問看護師はうつ状態を早く発見できケアあるいは専門治療へつなぐ立場にある(Sharon, 2005)とされ、広く健康問題に携わる訪問看護師の自殺予防に関する看護実践の実態を明らかにすることは、在宅医療での自殺対策に貢献すると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究は、3つの段階からなる。1段階目は訪問看護師の自殺関連事案の特徴を明示し、2段階目は訪問看護師のインタビュー調査による看護ケアの明確化と課題を抽出し、最後に連携する他職種およびエキスパートナースの聞き取り調査による自殺予防の看護ケアの課題解決のためのモデルを構築することであった。なお、本研究で用いる「訪問看護師」とは精神科に特化していない訪問看護を実践している訪問看護師とする。

### 3. 研究の方法

#### 1) 訪問看護師の自殺関連事案の特徴の明示

(1) 研究デザイン: 全国横断調査を行った。全国6地区の各訪問看護ステーションのうち、精神科訪問看護を主とするステーションを除く98~144カ所のステーションから無作為に訪問看護師を抽出し、合計694カ所の訪問看護ステーションを調査対象とした。

(2) 研究対象者: 精神科に特化していない訪問看護ステーションに在籍する、つまり身体疾患をもつ在宅療養者に対する訪問看護を実践している訪問看護師。

(3) 調査内容: 基本属性、訪問看護中の自殺ケアの経験、自殺念慮をもつ利用者への看護実践、自殺念慮をもつ利用者へのケア困難感を調査した。調査期間は2019年7月から9月であった。

(4) 分析方法: 基本属性に関しては記述統計量を算出した。看護実践とケア困難感は構成概念妥当性の検討として、探索的因子分析を行った。また、看護実践の各因子の合計得点を従属変数とし、対象者の背景とケア困難感の各因子を独立変数とし強制投入した重回帰分析を行った。統計解析はSPSS Statistics 23を用い、有意水準は $p < 0.05$ とした。

(5) 倫理的配慮: 本研究は、所属施設の研究倫理審査の承認を得て行った(承認番号2019-1)。対象者へは、研究の目的や方法、調査参加の自由意思、調査は無記名により行い個人は特定されないことを書面に記載し、個別返信をもって同意とみなした。

#### 2) 訪問看護師のインタビュー調査による看護ケアの明確化と課題抽出

(1) 研究デザイン: 質的記述的研究法で半構成化面接を行い分析した。

(2) 研究対象者: 精神科に特化していない訪問看護ステーションに在籍する、つまり身体疾患をもつ在宅療養者に対する訪問看護を実践している訪問看護師であり、かつ自殺念慮をもつ利用者に関わったことのある者。

(3) 調査内容: 主な話題は、看護師が自殺念慮のある患者をケアした経験、患者との相互作用の中で感じたこと、考えたこと、そしてどのように行動したかなどであった。調査期間は2022年3月から2022年11月であった。

(4) 分析方法: テーマ分析(Braun & Clarke, 2006)の手法を用いた。

(5) 倫理的配慮: 本研究は、所属施設の研究倫理審査の承認を得て行った(No. R0314)。対象者へは、研究目的や方法、研究参加の自由意思、個人情報等の遵守等を口頭および書面で説明し、同意書をもって同意したとみなした。

#### 3) 自殺念慮者に関わる多職種の訪問看護師との連携の明確化

本研究は、研究対象者9名の途中経過報告となる。

(1) 研究デザイン: 質的記述的研究法で半構成化面接を行い分析した。

(2) 研究対象者: 身体疾患をもち自殺念慮を有する在宅療養者に関わったことのある多職種(医師、薬剤師、リハビリテーション専門職種、介護福祉士、ケアマネージャー等)。

(3) 調査内容: 主な話題は、身体疾患をもち自殺念慮を有する在宅療養者に関わる上での訪問看護師との連携についてであった。

(4) 分析方法: テーマ分析(Braun & Clarke, 2006)の手法を用いた。

(5) 倫理的配慮: 本研究は、所属施設の研究倫理審査の承認を得て行った(23-fiuhw-003)。対象者へは、研究目的や方法、研究参加の自由意思、個人情報等の遵守等を口頭および書面で説明し、同意書をもって同意したとみなした。

### 4. 研究成果

### 1) 訪問看護師の自殺関連事案の特徴の明示

依頼した694施設の1518名に調査票を配布し、308名の回答を得た(回収率20.2%)。そのうち欠損値を除いた280名(有効回答率18.4%)を分析対象とした。対象者は、40歳代が最も多く、看護師経験年数は平均23.9(SD8.4)年、訪問看護の経験年数は平均9.1(SD6.5)年であった。精神科看護の経験者は33.2%、自殺予防研修受講者は14.3%であった。看護実践における【自殺のリスク因子の評価と特定】は利用者から死にたい気持ちを話された経験と有意な関連を示した。また看護実践の【専門的支援】はリスクに応じた環境づくりの困難感及び精神科看護の経験と有意な関連があった。訪問看護師が自殺念慮のあるクライアントのマネジメントを行うためには、コミュニケーションスキルやアセスメント能力を向上させる必要がある。

### 2) 訪問看護師のインタビュー調査による看護ケアの明確化と課題抽出

研究対象者は15名であった。訪問看護師は、利用者がいつもと違うと気づく一方で『死にたい』と聞いて迷い、そして利用者との関係性の維持を固執することにより核心には触れないように関係をつないでいく関わりを行っていた。具体的には、利用者が伝えてきたことを聞き、それを共有したいと思ったり、利用者の気分が上向きになるように元気づけたり、他者から情報を得るとともに得た情報を他職種へ伝達したり、時間的制約があるなかでのかかわりを行っていた(下図)。その結果、利用者との相互作用が停滞し、最終的には後悔を抱くという経験プロセスを辿っていた。患者の自殺念慮に対処しないことは、自殺リスク評価を不能にするだけでなく、患者の孤立を招く。したがって、訪問看護師は自殺リスクアセスメントとコミュニケーションスキルのトレーニングが必要である。またケアの継続性を達成するためには、精神科訪問看護師を含むリエゾンサービスの確立が望まれる。

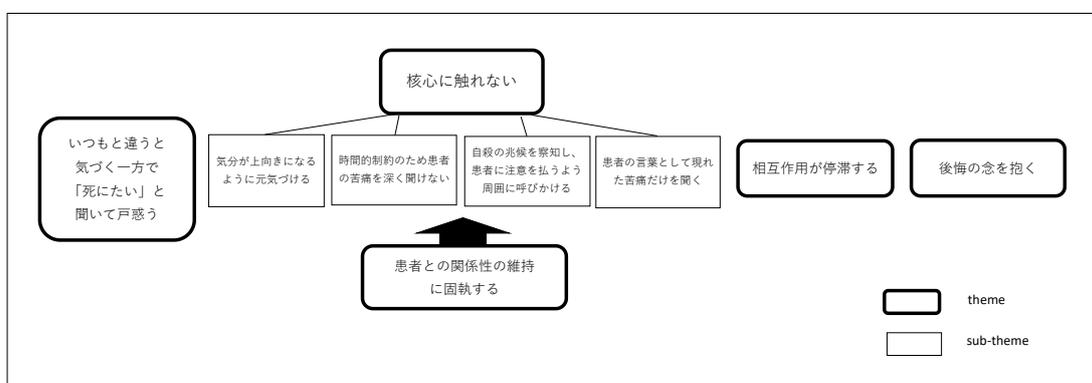


図 身体疾患をもち自殺念慮を有する患者の訪問看護師の経験のテーマとサブテーマの関係性

### 3) 自殺念慮者に関わる多職種の訪問看護師との連携の明確化

本研究は、研究対象者9名(医師3名、薬剤師1名、理学療法士2名、介護福祉士3名)の途中経過報告となる。対象者の平均年齢は42.6歳、2名が精神科医療の経験があり、全員が自殺予防研修等の受講歴はなかった。インタビュー調査後、逐語録の分析の結果、6つのテーマが生成された。多職種の訪問看護師との連携には《身体的苦痛から自殺念慮につながる情報を共有し患者像を捉える》ことが根底にあった。多職種は《訪問看護師の判断やケア方法を頼りにする》ことや訪問看護師に《引き出せない患者の気持ちを代わりに聞いてもらう》ことで患者像を捉えつつ、一方で自身の専門の範疇で《患者の精神的安定のために自分の専門性を活かす》ことで役割を互いに補い、共に《患者が生きることに前向きになるような関わりについて話し合う》連携が行われていた。さらにこれらの連携には《互いの精神的負担を理解する》ことが背景として示された。多職種は訪問看護師の判断や患者の気持ちを引き出す力を頼りにしながら自殺念慮者の情報を共有し患者像を捉えていることが示された。これは自殺予防研修の受講歴がないことから自殺のリスクアセスメントや対応が困難であることが要因と考えられる。したがって、多職種においても自殺のリスクアセスメントや自殺念慮者に対する基本的な対応を身につける必要があると考える。

#### 〈引用文献〉

- 厚生労働省(2017a): 自殺の統計: 各年の状況, Retrieved from [https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/shougaihashukushi/jisatsu/jisatsu\\_year.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaihashukushi/jisatsu/jisatsu_year.html), (2019年1月16日検索)。
- 厚生労働省(2017b): 在宅医療について, Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12404000-Hokenkyoku-Iryouka/0000186845.pdf>, (2019年11月16日検索)。
- Sharon, M. V. (2005): Detecting and evaluating depression among elderly patients in home health, Home Health Care Management & Practice, 17(2), 101-108, doi:10.1177/1084822304270023.
- Braun, V. (2006). Using thematic analysis in psychology. In V. Clarke (Ed.), (Vol. 3,

pp. 77-101): Qualitative Research in Psychology.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Chijiiwa Tomoko, Ishimura Kayoko, Deguchi Mutsuo	4. 巻 61
2. 論文標題 Factors Related to Nursing Practices of General Visiting Nurses for Clients With Suicidal Ideation in Japan	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Psychosocial Nursing and Mental Health Services	6. 最初と最後の頁 47～54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3928/02793695-20220613-04	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Chijiiwa Tomoko, Ishimura Kayoko	4. 巻 -
2. 論文標題 Experiences of general home visiting nurses regarding patients with suicidal ideation in Japan: Results from semi structured interviews	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Journal of Psychiatric and Mental Health Nursing	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jpm.13017	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Chijiiwa Tomoko, Ishimura Kayoko
2. 発表標題 Experiences of homecare nurses in Japan who care for patients with suicidal ideation
3. 学会等名 26th East Asian Forum of Nursing Scholars（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 千々岩友子、出口睦雄、石村佳代子
2. 発表標題 身体疾患のある在宅療養者に対する一般訪問看護師の自殺関連事案の実態（第一報）
3. 学会等名 日本精神保健看護学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 出口睦雄、千々岩友子、石村佳代子
2. 発表標題 自殺念慮のある在宅療養者に対する一般訪問看護師の看護実践の実態（第2報）
3. 学会等名 日本看護研究学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 千々岩友子、出口睦雄、石村佳代子
2. 発表標題 身体疾患があり自殺念慮をもつ在宅療養者への訪問看護実践の関連要因；自殺ケア経験とケア困難感の関連から
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	石村 佳代子  (Ishimura Kayoko)  (40295564)	国際医療福祉大学・小田原保健医療学部・教授    (32206)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------